

埴谷雄高論

月村敏行

埴谷雄高論

月村敏行

講談社

はにやゆたかろん
埴谷雄高論

一九七八年三月二四日第一刷発行

著者——月村敏行
つきむらとしゆき

© Tsukimura Toshiyuki 1978, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三―四四―二二 振替東京六―五三〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一四〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

目次

- 一 〈革命〉と〈自同律の不快〉 5

- 二 影の祝祭——『不合理ゆえに吾信ず』 43

- 三 「虚空」その他について 159

- 四 『死霊』——〈自同律の不快〉の四変奏 211

装帧·平島崇

埴谷雄高論

一 〈革命〉と〈自同律の不快〉

——「根本は革命という」語かね」秋山駿、座談会「死霊」論

埴谷雄高とは、底をついた文学者である。底をついたという、いささか情緒的なニュアンスを消し切れない言葉がいまいであれば、何ごとか根源につきあたりつてしまった文学者であり、人間であると言つてもよい。しかも、埴谷はそのことのために余の一切を排除せざるをえなかった。そういう根源へのつきあたり方をした文学者であり、人間なのである。

元来、日本文学史のなかでは、こういう人間は小説家と呼ばれる人種のなかには多くない。近い例では、太宰治ぐらいのもので、はなはだ稀有のことである。こういう人間は、多くは詩を書き、詩人と呼ばれていた筈なのだ。中原中也であり、萩原朔太郎である。あるいは、北村透谷である。いや、この三人にとどまらず、詩人と呼ばれた人たちは、少なからず底をついた顔をさらして生きてきた筈なのである。そして、こういう人達は必ず奇妙な読者を呼ぶ。志賀直哉とか小林秀雄とかの「教祖」という名を冠せられる文学者の読者と、ここにあらわれる読者とはよほどちがが違っている。志賀とか小林とかの読者は、要するに現世的に、あるいは現実的につきつめた表情で「教祖」の

周囲に集うているが、こちらは何やらとりとめなく茫洋とした表情をさらしたままなのだ。言ってみれば、百年後に知己を求めるといった顔つきなのである。読者と呼んだ当の本人たちがそうなのだと言えはそれまでだが、読者もまた百年後に知己を求めるというこの本質を分ちもてるとすれば、悪いことではない。現在では、一層そんなことが必要なのではあるまいか。

——いや、いや、わたしは埴谷雄高をわたしのビジョンのなかに呼びこもうとしたまでである。しかも、わたしは、埴谷雄高を白屋のなかに立たせてみることは可能か、というひそかな問いを考えてみたのである。すると、何やら至難が渦巻くごとくであって、とりとめない思いを我ながらもて余す風なのである。それはそうであろう。埴谷自身が「洞窟」のなかの人間を自認し、宇宙とか無限とかの果てにぶつかって、「あつは」や「ぶふい」を連発してきたのである。吉本隆明は「すぐれた対立者はいないか」という自己呪文めいた言葉で「埴谷雄高論」をはじめねばならなかったし、谷川雁は「遠くからの手紙」とまで書かねばならなかった。あるいは、井上光晴は埴谷論を小説として書くこうして果たせなかったとまで述べた。

しかし、わたしは、埴谷雄高を前にして、そういう思い入れたっぷりのものの一切からおさらばしておきたい気持ちが切である。当の本人がどんな「迷路」を気どろうと、書かれたものが全てである。書かれたものは書かれたものと

して、ただわれわれの前に投げ出されてあるばかりではないか。そのことをわたしは単に白屋と言ってみたまでである。そういうものとして全てを読む以外にないというのが、わたしのかねてからの信条であり、また方法である。もつとも、ほかならぬ埴谷雄高を前にして、そんなわたしの思いがすんなり実現してくれるかはおぼつかないことに属していよう。それならば、それでもまたよいのだ。わたしは解消しきれなかった思いを、それこそ白屋のなかに、百年後の知己をまつといった顔つきでさらせばよいのだから——。しかも、それは埴谷雄高自身のことでもあり、そのことの保証は埴谷自身から発してもいるのである。

しかし、埴谷から離れて、書かれたものが一切であり、全ては白屋のことだと言ってみても、そのこと自体に至難がひそんでいることも否めない。すでにわれわれの白屋の世界がひどくなりすぎているのである。いや、白屋の世界そのものは常にそうなのかもしれないが、それならば一層埴谷雄高をわたしのビジョンに呼び入れる前に、白屋の世界に触れておく必要があるかもしれない。ともあれ、わたしは偶々、文芸雑誌のひとつを手にしたにすぎないが、こんな一節が飛びこんできて、殆ど言葉を失なう次第であった。桶谷秀昭「戦後という時間」『文芸』七四年七月号)のなかである。

へ昨年の今頃だったか、磯田光一と入江隆則と三人で、某紙の座談会に出たとき、雑談の折、入江氏が「いま批評家

はみんな肚の中ではあの野郎と思っているんでしょ」というようなことを、自明のことにように口走ったの思い出す。私は黙っていたが、そんなものかなと思っただけで、返事のしようがなかった。だが、もしも入江氏の言う通りだったとしたら、そういう漠然とした不信感や敵意は、共通の基盤の失なわれている証拠かもしれない。

わたしはよくも知らなかったが、成程、白屋の世界は、こういうもので、それは桶谷の言う通りなのである。いや、わたしは怠惰で入江隆則については何も知ることがないので、ここでは「肚の中ではあの野郎と思っている」という発言だけにかかずらわるしかないが、ほんとうにこれはひどい言葉ではあるまいか。言葉の世界、わけて文学にわけ入った人間の口からの言葉とはとうてい信じられないようなものである。思うに、地獄に炎口ということがあ。文学にまことの力ありとせば、こんな言葉を吐いた口唇と舌とは言葉自身の炎によって焼き尽されるのにちがいない。

いや、大仰をさらすのは悪い趣味であろう。「肚の中ではあの野郎と思っている」という言葉を発する人間の内幕が、わたしには解せないだけなのだ。成程、われわれは口説の徒であり、他人に向って「あの野郎」とは口走るかもしれない。しかし、これは他人への忖度言であり、その「肚の中」の思いなのだ。わたしにそんな他人への思いが容易に可能であれば、文学なんぞとはさっさとおさらばを

して、もっとましな人生を送っているにちがいない。おめでたい限りにはちがいないが、これはわたしにとって自明であって、そんな言葉が不可能であればこそ、おめおめと文学なんぞにかかずらわっているのだ。これはわたしにおける最下限の一線ということになる。それとも、この場合の事情はもっと単純なのであろうか。つまり、そんな言葉を発する人間の内実とは、要するに、文学の世界にわけ入ったものの、秀れた文学者に出逢わなかったということだけなのだろうか。言いかえれば、どんな時代と状況に覆われようとも、読者をも含めて、百年後の知己をまつといったとりとめない顔つきをさらしている光景があり得るということに気づかなかつただけの結果なのであろうか。恐らく、そうにはちがいがいるまい。中原中也とその中也論、萩原朔太郎とその朔太郎論、北村透谷とその透谷論、というように思い返してみれば、この二つのものの結びつきは、何やらこの世のものではないような痛々しささえも放出しているであろう。それをここでは、仮に百年後の知己をまち、且つ信じるものの顔つきと言ってみたまでのことで、別に他意のあるわけでもない。しかも、一層考えてみれば、そんなものこそは文学が人間に与える本質というものでなくてはならない。そして、こういうものの現出が、多くは詩の領域に限られていることに気づかないわけにはいかない。小説の領域は何やら生臭く、何やら現世的であり、あの痛々しいまでの結びつきを保証しないところがあ

るのかもしれない。それならば、「肚の中ではあの野郎と思っている」のではないかなどという他人への忖度の言葉を発する人間の内実とは、単に詩の領域に踏みこんだことのないゆえだということになる。言いかえれば、これは詩の世界も分らぬまま文学における批評の言葉をもてあそぶことの内実がどういふものであるか、おぼえず明らかにしたというまでである。そして、こういうことこそはわれわれの白屋の世界の一斑である。桶谷秀昭は「共通の基盤の失なわれている証拠かもしれない」と書いたが、恐らく根はもっと深いのであって、わたしの言葉のとききようもない深所から発しているのにちがいない。しかし、さしあたったところ、これをしも、われわれの白屋の世界の一斑として認めておくことがわたしの埴谷論のはじまりである。つまり、こういうところに埴谷雄高を立たしめねばならぬとすればどうなるか。成程、至難は渦巻き、わたしがとりとめない思いに落ち入るのも当然ということになるが、埴谷その人にしたところで、こういう白屋の世界にこそ存分とつき合ひ、(わたしのような)読者をほらはらせてきてはいるのである。

例えば、手近なところで、開高健、江藤淳による対談「政治と文学」(『文学界』七五年十月号)があろう。ここで、開高が言い出し、江藤が尻馬に乗ったかたちでしゃべりまくっている「誠実」論議は愚劣の極みだが、続けて江藤が埴谷雄高における、いわば白屋の世界の姿というものに触

れている条りには、成程とうなずかせるものがないではない。こんな具合である。

「埴谷さんは……たいへんな遊び人でもあるし、ダンスもうまいし、魅力的な人です。ただし、この人は、人を操作する人です。」

「アジテーターとはあえて言わない。もつと微妙で高級なものです。……この人は、人を感奮興起させるんです。」

……ところが、その一歩先がいけないんです。われわれはどこか感奮興起することを求めているから、その言葉が非常に甘く響く。しかし、その結果、私が私の運命をたどり出したとき、「きみ、それは違う」ということになる。なぜ違うのか、おれはこれしか生きようがないじゃないか、ということになる。

「あの人は、ホモ・ポリティクスを一步も出ていないのに、そうでないふりをしている。」

そして、江藤はかつての反安保闘争における体験をしやべり出している。江藤は羽田空港に生じたハガティ反対デモにおける「大衆運動」の実状に、「まったく失望落胆」して、その旨を『朝日ジャーナル』に書いたとき、こんなことが生じたというのである。

「それが活字になって出たら、埴谷さんからきたコメントは、私の記憶に残っている限りでいえば、「それは事実かもしれないけれども、いまそれを言うことは、政治的に不利になる」と言うのだった。私は、この言葉の卑俗をいま

だ許さないんです。」(註)

成程、埴谷雄高の白屋の姿は、こういうものであった。

要するに埴谷は白屋の世界を生きてもいいし、また白屋の世界を拒絶してきたわけでもない。それは、まったくのところ、白屋の世界における中性的、ニュートラルな生存としか言いようがないものである。江藤のような判断の成立する所以であるが、ほんとうは、埴谷を前にしてそんな判断を直截に提出してみてもダメなのだ。せめて、何故、埴谷にあつては白屋の世界における中性的な生存が立ちあらわれたらうか——そんな問いぐらいは発してみるべきである。「あの人は、ホモ・ポリティクスを一步も出ていないのに、そうでないふりをしている」なんて高級な問題は、江藤が埴谷の許へ「時々、遊びに行つた」体験に裏打ちされているのかもしれないが、書かれたものが一切であるとすれば、埴谷は「ホモ・ポリティクスを一步も出ていないのに、そうでないふり」しかできないのである。元来、人生なるものがそのように出来あがつていふと言つてもよいが、なお考えを伸ばして、ここに、埴谷が自分の思想を把んだときの特徴を見定めておいてもよいのだ。つまり、埴谷は白屋の世界がそれとして立つ姿に、どんな拒絶もしなかつたし、またどんな迎え入れる術をもこうじなかつた。白屋の世界をただに白屋の世界として認容することが埴谷のこの場面における全てだったので、その中性的な生存とはこういうことの必然なのである。こういう埴谷が、

他ならぬ白昼の世界をどんなすさまじき限りないものとみていたか、想定に難くないであろう。後で触れるように、それこそが埴谷の思想の核心であつて、わたしなどの想定をまったく越えていることでもある。いや、わたしにしても、白昼の世界のすさまじきに肝をつぶさないこともない。それは、「肚の中ではあの野郎と思っている」という発言にかかわっているばかりではなく、開高、江藤という、この対談にもふんだんに盛り上っていることでもあるのだ。

例えば、開高が「あつは」「ぶふい」というのが、昔から二つ出てくるんだけれども、肉声の嘲笑として使われているわけでしょう。『あつは』の嘲笑と『ぶふい』の嘲笑との使用の区別が、私にはわからないのよ」と言いだして、江藤が「私もよくわからないな」と応じているのだが、わたしなどは、これもすさまじきことだとおちのめされる塩梅である。御両人ともども日本の文学畑を二十余年は張り通してきた人間であろう。その彼らにしてこうなのだ。江藤は『死霊』の言葉を「人工言語」であり、小説は、本来「自然言語」のはずだ、などと言いだしてもいるが、そんなことより何より「あつは」と「ぶふい」を舌の上に転がしてみるだけでよかったのだ。むろん、わが国語のれっきとした音韻としてである。ここでは、『死霊』のあれこれの場面は必要でなく、ただ二つの言葉を舌の上に転がせばよかっただけだ。そうすれば、「あつは」は近く

強く響き、「ぶふい」は遠く長く響くことにたやすく気づきたはずである。それから、『死霊』の場面へひき返す意志があれば、そうしてもよい。成程、この二つが開高の言つてるように「嘲笑」（ほんとうはそれだけではないが）と考へうれば、「あつは」とは自分への、「ぶふい」とは他人への、それぞれの「嘲笑」と考へてもよいのである。もっとも、『死霊』に他人がいるのか、という言説が投げられるかもしれないが、それならば「あつは」とは自分の自分に対する近接した関係において、「ぶふい」とは自分の自分に対する遠隔の関係において、「嘲笑」が発しられているのである。このことは『死霊』のいちいちの引用例に徴することが必要なくらいに、わたしには明瞭なことと思われる。要するに、『死霊』に目をさらした後に、「あつは」なり「ぶふい」なりを舌の上に転がすだけで済むは、ないだが、事態はこんな些事においても錯綜を極めていゝ。そして、こんな錯綜を縫つて、江藤における人工言語とか自然言語とかの言説が渦巻きはじめるが、むろん、天から降つてきたような人工言語とか自然言語とかの差別のなかにわれわれは生きているわけではない。成程、江藤は『死霊』、わけて『夢魔の世界』に眠気を誘われて仕方なかったと強調しているから、この言語をめぐる人工性と自然性の差別は眠気に帳尻を合せたのにちがひなかるうが、批評の手續きというものは自ら別である。そして、『夢魔の世界』の出現について、「二十数年前の文体と発想のままを

維持していらつしやるというのは、並々ならぬことだという感慨」という開高の発言から、「誠実」論議が飛びかう始末である。愚劣極まりないことである。ここでは、『夢魔の世界』の出現が、例えば寢小便の癖という次元で考えられているにすぎない。二十数年前に寢小便の癖のあった人間が、現在もまだ同じ癖をさらしてしまつたとき、この事態が「誠実」論議の対象になるかどうか。いや、現在のわたしが豚児の寢小便根治に空しい力を尽しているからといって、こんな例示を考えるわけでは毛頭ないが、出現しているものは、寢小便をして泣きべそをかいている豚児ではなくて、『夢魔の世界』という作品なのである。しかも、ほんとうは、例示がまちがつているわけでもない。埴谷が底をついたと言い、根源につきあたつたと言い、それはこういう例示さえも許容することであつて、要するに埴谷においては、何もかもが底をさらつて現出するという以外ではないのである。江藤淳はなおもしやべつてゐる。

へこの作品は社会革命を論じているというけれども、それ自体はおよそ非社会的なんだな。反社会的というか、むしろ非社会的なんだ。社会というファクターがまったく抜けている。

はつきりしていることは、『死霊』が「社会革命を論じている」のではなく、「存在の革命」の書だということである。その限りでは、「社会」というファクターがまったく抜けている」という江藤の指摘は肯綮に当たっているが、何

とも無惨なのは江藤の視線が「存在の革命」ということにとどきようもないことである。「死霊」、わけて『夢魔の世界』がこのことを核心として提出しているのは自明であつて、それこそは埴谷における底をついた姿の本質にかかつてゐるのだ。それならば、江藤にはこのことの「ファクター」がまったく抜けている」ので、核心をなす「存在の革命」に触れようもないのである。そんなところで、何を論じだそうとどうしようもないのは自明である。

そして、こういうこれらあれらを含めて、白屋の世界のすさまじさと言つてみるができる。埴谷その人の愛好するブレイク詩の一節、「病むべく創られながら、健やかにと命じられて」とは、まさしくかかる白屋の世界の姿にほかなるまい。むろん、これは埴谷自身がつかんだ白屋の世界の姿でもあつて、わたしなどが江藤淳や開高健や某々の白屋の姿におたおたする以前に、こんな姿などのとうてい及びえない一層すさまじい白屋の世界を深く嚙みしめたにちがいないのである。しかも、埴谷はすでに述べたように、この白屋の世界を拒絶もしなかつたし、さりとて迎へ入れようとしなかつた。それを一口に、中性的な生存と言つてみたが、そのことの一斑は江藤のえがく埴谷像に打ち出されていたことでもあらう。いや、わたしの友人にしているから、埴谷という人の顔はダメだよ、と言ひ放つたことがある。ある場合には、そう言い切つて済ますこともできようが、わたしの埴谷像に照らして、なお埴谷の生身の

顔を凝視することが可能であれば、そこにはある不可解なものが漂っている筈なのだ。言いかえれば、白屋の世界における中性的な生存が本質として湛えている何ものかのことである。実際、白屋の世界とは、先のブレーク詩を借りて言えば、病む顔をそのままさらすか、命ぜられるまま健やかさを擬するか、どちらかの択一性において成立しているのであって、元来、中性的な生存は許容しないのである。それゆえ、埴谷における中性的な生存とは埴谷自身に発した意志の所産にほかならないが、この意志はただに中性的な生存そのことのみをめぐるのであって、例えばこれが白屋の世界と触れあうそのことの場面には伸びていくわけではない。ここに白屋の世界に、いわば後向きの意志を想定してもよいのである。あるいは、埴谷風な言い方をすれば、白屋の世界に対する「のっぺらぼう」な意志である。成程、(わたしのような)読者は白屋の世界における埴谷の姿にはらはらするであろう。江藤もまた「その卑俗は許したい」とつぶやくであろう。しかし、それらの思いはさながら「のっぺらぼう」な背面に向って言葉を発してみたごとくであって、それ自身において空しいのである。ここでは、この空しさだけが埴谷の発している唯一つの信号である。これを解きうれば、「のっぺらぼう」の背面に鉛筆でこすり出すようにして埴谷の向うむきの顔が浮きかたってくるかもしれない。わたし自身がどう転ぶか分った限り

ではないが、書かれたものが一切だというわたしの信条だけは手放すまい。埴谷の顔とか江藤のような体験に直接したものは、空しさの傍証としてくっつけておくに如くはない。一歩を進めよう。

註、江藤淳のこの発言に關しては、後になって埴谷は「江藤淳のこと」という反論を書いた。反論は多岐にわたっている。引用はさしひかえるが、「埴谷さんからのコメント」はないということ、また、あり得たとしても、そのコメントの内容は江藤淳の理解するようなことにはならない、ということに尽きている。

2

さて、埴谷は知られているように、青春期に共産黨員であった時期を経過している。日本共産党の農業綱領草案の起草に参加したというのであって、むろん、いわゆる地下運動生活である。このことは白川正芳編「埴谷雄高年譜」によって、いくらか詳細に考えておくべきかもしれない。それによれば――

昭和四年、十九歳のときに「ステイルネルふうなアナキズムからマルクス主義へ移る」という記述が読める。レニン『国家と革命』をアナキズムによってひっくり返

した『革命と国家』という著作にとりかかるが、挫折という時期である。翌五年、二十歳には「プロレタリア科学研究所農業問題研究会を経て、農民闘争社」に入っている。六年、二十一歳で日本共産党入党、農業綱領草案起草に参加、「農民運動の歴史―その方向と形態」をうけもち、論文「農民委員会について」を発表している。翌七年、二十二歳の三月にはすでに逮捕であつて、豊多摩刑務所でカント『純粹理性批判』に出逢うのはこの時期であり、『死霊』の原型も構想されたと言う。それから、最初の文学的結実であり、また自身言うところの「論理と詩の婚姻」の書である『不合理ゆえに吾信ず』が発表されるのは七年後、つまり昭和十四年、二十九歳である。

これを一口に、異様な早熟と遅すぎる文学的出発と言つてみることは可能であろうか。もともと、早熟ということとはしかとは分らない。レーニンが「共産党宣言」を翻訳するのは十九歳で『人民の友とは何か』を書くのは、二十三歳だ。あるいは、小林多喜二が虐殺されたのは二十八歳、蔵原惟人が生涯の主要著作となつた『芸術論』を完成させるのは二十五歳までの時期である。才能の成長、その開花ということとは、時代がせき立てるという面があるにちがいない。それならば、一層異様なのは遅すぎる文学的出発ということであろうか。埴谷雄高に、いわば外型的な軌跡が似ている文学者に島木健作を考えてみれば、どうなるか。即ち、島木もまた農民運動に従事、地下生活の後に、逮

捕、出獄、処女作『癩』の発表という軌跡をえがいているが、これは昭和七年、二十九歳の三月に出獄、昭和八年、三十歳の暮に『癩』の執筆という次第であつて、その間は二年にも充たない。

やはり埴谷における特質的なものを、先ずは遅すぎる文学的出発に見定めておいてよいかもしれない。この遅すぎる文学的出発を支える出獄後の七年間とは、例の「語学とデモノロギイに耽溺」という時期なのである。だが、ほんとうは遅すぎることよりも何よりも、政治運動、わけて共産党内地下運動を経過した後に、文学的出発を遂げるということが異様なのである。由來、戦前までの日本文学史では、政治運動を経過した後の文学的出発とは、文学の本質相に対しては常にあまいな位相を余儀なくされるというのは公理である。島木健作は典型である。例えば、中野重治が『生活の探求』に対して書いたことがあつた。

「作者はあるところで『鑿で木に穴をうがつたり』と書いている。しかし、鑿で木に穴を『うがつ』ということはない。他のあるところでは『血潮は幾重にも捲いた手拭地の上にまで』と書いている。これは足の『親指の爪の上』を怪我をしたときの話だが、親指へ怪我をして『血潮』ということはないだろう。』(『生活の探究』について)

こういう中野の指摘をうけて、島木は『信用のおける辞書』を調べて、『中野氏は何か誤解しているのではないか』と反駁(窪川鶴次郎「人間と真実の問題」)したというの

である。島木その人に仔細に触れているわけにもいかないが、要するに、島木を律したものは「信用のおける辞書」であって、島木は自分の本質をこれに託したまま、自分そのものの姿は常にあいまいに放置してきたのである。『生活の探求』ひとつを考えても、農業問題に関して、農村と農民に関して、主人公に関して、何もかもあいまいであって、しかし島木の文学者としての特質は、このあいまいさをひとつのレンズとして実に巧みな絞り加減を自在に駆使するところにあった。こういうあいまいさの自在な駆使が文学の本質相に直面することから絶望的に遠いのは自明であって、それを島木が政治運動を経過したことの刻印として考えてもよいのだ。あるいは、やはり政治運動を経過した後には文学的出発を遂げた亀井勝一郎を、ここに数えておくべきであろうか。亀井にしたところで、人間に対して、文学に対して、思想と歴史に対して、あいまいな顔を万遍なく振り向けるというところにその批評家としての本質を見出せるのであって、橋川文三『日本浪漫派批判序説』における亀井への立言、「あいまいなジャーナリストの風貌」がよく成立する所以である。それかあらぬか、亀井は『生活の探求』の主人公、杉野駿介をタイトルに附し、島木に自分の分身を見出しているかのようなエッセーさえも書いていよう。

これを要するに、日本における政治運動は、文学なら文学の本質相に直面する力を、根底から破壊してしまう毒を

もっているのではあるまいか。谷口善太郎が「木綿」という佳品を書いた後に、政治運動のなかに埋没していったのも故ないことではない。あるいは、参議院当選、いくばくかの国会活動の後に『むらぎも』を発表した中野重治にむかって、ダメになるかと思つたが、そうならず「不思議な人である」と書いたのは本多秋五(中野重治)であつた。むろん、本多は「政治と文学」の重ね餅のような時代を生きてきたのであって、その言は真実を根底的に射ぬいているにちがいない。

そして、埴谷雄高はどうであろうか。埴谷はプロレタリア文学などというものでなく、れっきとした金ムクの「党内生活」を経過してきているのである。しかし、ここで埴谷における異様な早熟という側面をそれとして考えておいてよいかもしれない。ふたたび、白川正芳編「埴谷雄高年譜」によれば、ボオを読むのが九歳、ドストエフスキイ『白痴』を読むのが十三歳、ブルースト「スワンの方」を読むのが十七歳である。十七歳と言えば、現在の高校二年生であつて、ブルーストなどは多くの者が読むかもしれないが、やはり異様なのは、ブルーストを読んだ後の農業綱領草案起草という続き具合である。青春は不可解だと言え、それまでだが、こういう不可解さは埴谷にとどめをさすのではあるまいか。しかし、埴谷の生涯を考えてみれば、少年期からはじまる文学と思索との量における圧倒的持続であつて、そのアドレセンスに重なつたつた一年